

初期江戸僧諍研究

一独立性易と黄檗僧との論争について

賈 光 佐

はじめに

陳垣の『清初僧諍記』は「僧諍」⁽¹⁾研究の嚆矢である。荒木見悟は『清初僧諍記』について、明清鼎革期の逃禅した士大夫とそれに対する仏教界の、世俗と政治も絡んだ複雑な状況下での対応といった、中国思想史における宋初より清初にかけて最も注目すべき現象の一つである、儒教と仏教との交流及びその影響⁽³⁾に関して「学界の空白を埋める先駆的業績」であると評している。

その後、野口善敬の三つの「明末清初僧諍覚書」では、明末清初における、臨済宗の密雲円悟（一五六六―一六四二）⁽⁴⁾及び費隱通容（一五九三―一六六一）⁽⁵⁾と曹洞宗の覚浪道盛（一五九二―一六五九）及び同臨済宗の漢月法蔵（一五七三―一六三五）⁽⁶⁾との「僧諍」について考察されている。同様に、『清初僧諍記』に始まる「僧諍」研究の延長線上には呉彊の『論争における覚悟』がある。そこにおいては、密雲円悟と漢月法蔵の論争、天皇道悟と天王道悟をめぐる論争及び費隱通容の『五灯厳統』によって引き起こされた「済洞之争」⁽⁷⁾について考察が加えられている。呉彊は陳垣の著述の内容を「ほぼすべての論争は密雲円悟とその弟子に関わっている」とまとめており、「費隱は法系の内外を問わず、弟子とともに意欲的に論戦に参加している」という密雲と費隱の法系が意欲的に論争しようとするという特徴を有していることを指摘している。⁽⁸⁾

陳氏の僧諍研究と比べると、現在までのそれには二つの問題点が存在することがわかる。第一の問題は、その研究対象が中国における出来事に限られているということである。しかし、従来の僧諍研究の主要対象となっていた密雲・

費隱の精神を継承して、「戦闘的精神」をさらに継承し発揚して日本で新宗派⁽⁹⁾を成立させた隠元及びその弟子ら、いわゆる黄檗僧は、異国である日本においても多くの僧諍に関係しており、僧諍研究の上で注目に値するであろう。そういった「僧諍」を考察することで、「日本」という中国人にとって新しい文化・政治の環境下で士大夫と禅者の生き様に対する理解を深めることができる。第二の問題は、明末清初期の「僧諍」研究においては、儒仏交渉は重要な意義を持つと認識されてきたが、従来の研究の多くは儒者・士大夫との関係が薄く、禅宗内部における教学や法系をめぐる論争に終始したものであるということである。

本稿では、上記二点の問題意識に基づき、異国での儒仏交渉の実態を理解する上で、黄檗宗に士大夫として関係した独立性易（一五九二―一六七三）に注目したい。独立は元来儒者であり、明清の乱を避けるために渡日して隠元隆琦（一五九六―一六七二）に従い出家したが、日本で黄檗僧と多方面にわたって論争を繰り広げ、ついに僧団離脱を余儀なくされたのである。彼は黄檗宗で出家したが、ほかの黄檗僧と異なる思考を持っていた⁽¹¹⁾。また、研究対象としての独立について特筆すべきは、それらの論争の背景等に関する史料が、多く残存していることである。そのような史料を発見して活用し、具体的な事実を再構築することで、呉彊が指摘した通り、宗教・社会・文化の変遷について詳しく理解することができ、黄檗宗の研究の未来に繋がる⁽¹²⁾と言えるだろう⁽¹³⁾。

独立に関する研究において早くから議論的になる課題として挙げられるのは、彼が儒者か、あるいは仏教者であるかという問題である。東条琴台は独立の遺民としての節義を重視して、儒者として捉えている⁽¹⁴⁾。これに関連して、独立が晩年に藩主吉川広嘉（一六二一―一六七九）を治療するため長い間に渡って滞在していた岩国においては、その「操持」・「節義」が長く称揚されていた⁽¹⁵⁾ということも注目される。これらと多少異なるのは、独立が禅の知識に乏しい、禅に対する貢献が少ないといったことから、儒者、あるいは「学者」とする捉え方である。その代表的なものは、独立の時代よりやや下るが、臨済宗の僧、

無著道忠（一六五三―一七四五）による、独立の仏学における知識の浅薄さと儒者としての悪癖に対する批判である。⁽¹⁶⁾ 韋祖輝は独立について、五十歳になってから出家しており、禅学において貢献が少ないなどの理由から、仏教者ではなく、「学者」と捉えている。⁽¹⁷⁾ こうした独立の儒者の側面を強調する論点と正反対に、梁容若は東条の主張は誤りであるとし、独立が隠元の教化で悟ったということ、さらに、独立が朱舜水に出家を勧めたことから、独立は積極的に弘法していた⁽¹⁸⁾ということを主張している。

このように、先学らは独立が儒者か仏教者かについて、それぞれ史料を援引しながら異なる論点を主張してきた。独立の話は自身の状況により、一貫しているわけではない。そのため、研究者が自身の主張に合わせて史料を証拠にしても、その恣意性は避けられないのであろう。そのため、この問題を解決する上で、独立と黄檗僧との関係、及びそこにみられる独立の仏教に対する態度の変化が手掛かりになるであろう。

近年、この問題について、徐興慶は広範囲の史料調査を行ない、独立と黄檗僧との間には重大な摩擦があったことを初めて実証的に考察した。徐氏の研究は、この問題について大きな進展をもたらしたといえよう。

しかし、独立の書簡などの史料を精査すると、徐氏の、独立の黄檗僧団との摩擦の要因などに関する指摘に反する証拠が多くみられる。よって、徐氏が「機会主義者（オポチュニスト）」として描く独立性易の人間像についても再考しなければならない。そこで、本稿では独立と黄檗僧との僧諍の始末を考察することを通じて、独立の人間像について、改めて明らかにしたい。その過程で、黄檗宗という十七世紀渡日僧のコミュニティの特徴の一側面も明らかにすることができると考えられる。

一 独立の日本滞在及び黄檗宗での出家

独立は承応二（一六五八）年に日本に渡来した。⁽¹⁹⁾ 先学らは独立の日本渡来の背景と動機については見解が一致しているのに対して、彼の日本滞在、さらに

黄檗出家の際緯については、多岐にわたる論説を展開してきた。それらの論説は、独立の日本滞在と黄檗帰依を合わせて捉えている「隠元書記説」、「一旦帰国説」、「隠元同郷説」の三つと、渡日した後に出家に至ったとする「法威感動説」「生活維持説」の二つに分けられる。以下、それぞれの概略を述べる。

「隠元書記説」とは、独立が書法に長じていたことから、隠元の書記招聘に応じるため、黄檗宗で出家したという説である。例えば、高井恭子は隠元が独立の知識を求めて、彼を書記に迎えたとする。この捉え方は、東条琴台に遡ることができる。東条によると、独立は日本に来て、当時の長崎奉行に留められて一年間滞在して帰国したが、翌年隠元が日本の招聘に応じて、黄檗宗を日本で振起しようとした際、書記を担当できる人材を遍く求めたことで、独立はそれに応じて出家したという。それに対して今関天彭は、東条氏の「隠元書記説」に賛同しながらも、独立が「一度日本に来遊し、一年ほど居て帰国し、更に隠元禅師に随従して再来した」という「一旦帰国説」に対して、「明らかに誤謬である」と指摘している。独立は日本に来てから帰国したことがない。そのため、今関氏の説は正しいものと考えられる。

その次、独立が隠元と同じ杭州出身で、年齢も近く、中国にいた時にはすでに知合であったために出家したという今関氏の「隠元同郷説」である。しかし、隠元は福建福清出身であり、この指摘も事実と反していると言わざるを得ない。

第三に、独立が隠元の法威に感動して出家したという、山本悦心氏や桂芳樹氏、石村喜英氏、梁容若氏など、多くの先学が賛同している有力な説である。この説は、独立の弟子、深見玄岱の碑銘の記述に根拠を求めることができる。

第四には、このような捉え方に対して、徐氏は独立の岩国藩主吉川広嘉宛の書簡に基づいて、独立の出家の動機を、「偶然のきっかけから異国日本へと渡り、医術に明るかったがために長崎に定住することの許可を得た。ところが、年とともに身体の衰えを覚えるに至り、出家して僧となることで新たな進路を見い出そうとした」と捉えている。さらに、独立が常に吐露していた帰国の意欲についても、虚言であると論じている。

上記の諸説のうち、東条氏の「一旦帰国説」や、今関氏の「隠元同郷説」は明らかに事実に反しているが、以下の三つの問題は未だ十分に検討されていない。第一には、梁氏や高井氏も賛同する有力な、「隠元書記説」⁽³²⁾であり、第二には、多くの先学が主張する「法威感動説」と徐氏が新発見史料に基づいて提出した「生活維持説」との間に存する矛盾である。第三には、徐氏が疑問視する独立の帰国の意欲が、果たして虚言であったかという問題である。

まず、独立が隠元の書記に応募するために出家したという「隠元書記」説について、徐氏はすでに独立が隠元の書記になったのは不本意であったと論証し⁽³³⁾た。続いて、「法威感動説」と「生活維持説」については、それぞれに裏付けの証拠があるが、徐氏のように、独立が出家してから十五年後の吉川への書簡において出家の動機として述べている「老命莫可依存（高齢者で身を寄せる方法はない）」をもって、出家当時に述べた「志参禅理（禅理の研鑽を志す）」を動機とするのは事実に反する言説だと捉えるのは疑問である。そこでは、独立のこうした一見して自己矛盾の言説の背後に心境の変化があることが見逃されているのではなかろうか。また、両者は矛盾しないという石村氏の捉え方は独立が出家を決意した際の実態に近いが、出家の動機について、僧団離脱以降の独立が隠元への敬慕や禅の参究などに言及した史料は、現時点では全く存在しない。こうした変化は、僧団離脱前後の独立の心境の変化を表しているであろう。詳しくは、次節で分析する。

第三に、独立が頻繁に吐露していた帰国の願望は、果たして徐氏が指摘するように、虚言であったのかという問題である。これについて徐氏は、鎖国下の長崎では、長期滞在が厳しく管理されていたが、唐船往来の自由があり、それは朱舜水が七回にもわたって長崎に行き来していたことから明白であると指摘している⁽³⁴⁾。しかし、当時日本で、中国人の帰国に対して強い制限がかけられていたことは、独立の親友であった南源性派が「我作回唐計未成（私は中国に戻ることを計画したが、できなかつた）」⁽³⁵⁾と述べていることからわかる。以下、独立の帰国の願望が虚言であったかについて検討する。その背景には、独立自

身が述べているように、長崎奉行に留められて滞在したという事実がある。

独立は一六五八年に書いた『千字文跋』で、長崎奉行が通事をつけて身分調査をした際に、独立が「業儒知医（儒者を職としていたとともに、医術をつかさどること）」を知ったことで、「保留在崎、医縁自度（長崎に保留させて、治療の関係で自分で生計を立てる）」こととなり、その翌年に隠元が日本に到着して、生計のためもあるが、参禅の志向もあるため出家したと述べている。⁽³⁶⁾安東省菴宛の書簡もこれと一致しているため、独立がその医術のために長崎奉行によって留められたということは明白であろう。

独立の帰国の意欲に関係する記述は、彼の日本滞在の背景及び黄檗僧との関係の双方に関わっており、僧団離脱直後、閉関の前及び閉関の後という三つの段階に分けられる。第一段階は、独立が一六五八年に僧団を離れて、長崎に戻って逸然性融と一緒に幻寄山房に住むようになった時期であった。その翌年には、独立は初めて帰国の願望を朱舜水への書簡において表している。

是今遽起回唐一心、就返郷国以安其貧与病、寒与飢、死与埋而已、無他籌也。曩者為僧、一念将庸安其流寓之跡。至其嫉才与名、一自消其往因之成。⁽³⁸⁾卒計遠郷、自計其老病之当帰也如此。

今、にわかに中国に帰る考えを起こしても、故国に帰って、自分の貧困と病気、寒さと飢餓、そして死を待つほかない。昔、私が僧となったのは、ひたすらそれによって異国での生活を安定させようとしたためである。しかし、そうした（私の）才能や名声を妬まれるようになって、出家した意義が完全に潰えてしまった。そのため、結局帰国をしようと考えた。

この書簡からは、独立が黄檗僧にその才能と名声を嫉妬されたことで、生活を安定させるという当初の目的が達成できなくなったため、帰国の念願を起こしたということがわかる。続いて、第二段階には、独立は竺印にも帰国の願望を表しているが、その理由として、ともに生活していた逸然が苦境下におかれ

ており、自分が帰国しなければ、生活を維持するのは非常に困難であると述べている。⁽³⁹⁾第三段階には、独立が一六六三年に長崎の大火事で住居を失い、ちょうど独立が日本に到着した一六五三年から十年という節目でもあったため、竺印宛の書簡において、頻繁に長崎奉行黒川正直と独立とが交わした十年の約束を強調して帰国のための援助を求めている。⁽⁴⁰⁾

二 独立と黄檗僧団との不和について

独立は一六五三年三月に長崎に着いて、翌年の十二月に隠元のもとで出家したが、一六五八年十二月に僧団を離れて長崎に戻った。その背景について、先行研究の多くは、高玄岱の『碑銘』に記されている「病仮帰崎（病気のため休暇を求めて長崎に戻った）」に基づいて、独立は病気を治すために長崎に戻ったとしている。⁽⁴¹⁾

それに対して、人間関係の悪化が独立の僧団離脱の一因であったという主張も有力だが、誰との関係悪化によって独立が僧団離脱を余儀なくされたのかという問題については、様々な説が展開されてきた。石村氏はそれを「幕府要路の官人」などの日本人であると論じている。⁽⁴²⁾桂氏は黄檗僧との軋轢を記述した独立自筆の書簡に言及したが、詳しくは説明していない。⁽⁴³⁾

近年、徐氏は新発見史料に基づいて、独立が長崎に戻った背景には、黄檗僧との関係の悪化があると論じている。徐氏の説をまとめると、(一)独立が出家・修行の経験をもっていなかったために、黄檗僧団で異類となり、加えて(二)黄檗僧が福建省出身であるのに対して、独立は浙江省出身であるという出身地の相違によって軋轢が生じた。そして、それにより苦しんでいた(三)独立は隠元一行に従い江戸に行った際に、江西出身の医者五雲子の助けを借りて江戸に滞在しようと画策したところ、隠元らに発見されて、僧団を離れることを余儀なくされた⁽⁴⁴⁾という三点となる。次に、上記の三点を検証しつつ、事実を改めて考察していこう。⁽⁴⁵⁾

まず、独立には出家・修行の経験がないのかという問題を考察する上で、独

立の次の詩が参考になる。

十年虜変剃髮生存避跡以来、鏡中喜見髮毛復長
種種霜毛削復生、鏡中喜見鶚冠成。十年可詫如僧鬢、一日難忘戴髮情。⁽⁴⁶⁾

十年にわたる異民族の動乱の中で剃髮し、隠棲の生活をして以来、鏡に映る、自分の髪が伸びているのを見ると嬉しくなる。

いくつもの白髪を剃り、それがまた生じて、鏡の中では冠のような髪型になったのを見ると嬉しくなる。僧侶のような髪型にしてはや十年、髪をかぶる感情は一日も忘れ難かった。⁽⁴⁷⁾

この詩は『東矣吟』という詩集に収録されているものである。『東矣吟』について、独立は「是篇紀予東来萍寄未脱白時吟草也（この詩集は私が日本に渡来して住居も定まっておらず、まだ出家していない時に詠んだ詩を記すものである）」⁽⁴⁸⁾と紹介している。「脱白」は出家を意味するため、この詩は独立が黄檗で出家する前に書いたものであるとみなせよう。この紹介から、独立は中国において、すでに十年間僧侶の髪型で生活していたことがわかる。もちろん、独立の剃髮には、清朝の「薙髮令（辮髮令）」に対して多くの遺民が僧侶の髪型にし、すなわち「逃禪」して「遺民僧」になったという背景があると考えられる。⁽⁴⁹⁾それだけではなく、独立が仏教者と交流しており、さらに仏教に対する関心も持っていたことが「槩山遺草序」から確認できる。

「槩山遺草」は独立にとって黄檗僧団にいる数少ない友人である良衍がその⁽⁵⁰⁾師匠、時潔隆璋の遺稿を編集した詩集である。「槩山遺草序」は、独立がこの詩集のために書いた序であり、その中で事実と反することを綴っているとは考えにくい。そこにおいて、独立は江南地区の仏教者らと交流しており、それらの仏教者が黄檗を推重していたため、早くから黄檗を敬慕するようになったと⁽⁵¹⁾記している。このことから、独立と黄檗僧との軋轢について、彼が晩年になってから出家したために、仏教の知識が欠けていることによると捉えるのは誤り

であると言わざるを得ない。

続いて、徐氏が挙げた独立と黄檗僧との関係悪化の第二の要因、出身地の相違は確実であるかという点について考察する。この問題を考察する上では、独立が一六五九年に竺印祖門（一六一〇—一六七七）に宛てた書簡が参考になる。⁽⁵²⁾

豈知一作同群、便為浙、福二字起限、小人從中唆哄。以逸然及我、不曰法道可依、日以是非莫辯。至普門後、逸然禍不能自生。而弟無故中被小人唆發長崎者屢屢、惟有日本国法不敢越。是時、有以煩道誼求稟還崎為遠辱也。⁽⁵³⁾及逸然幸得生還、而弟亦得少安。

僧団の中で、浙（江省）、福（建省）の二字によりわだかまりが生じ、卑しい人（黄檗僧）らが仲間内で唆したということは、想像にもつかなかった。そのため、逸然と私は隠元を頼りにするどころか、日増しに正誤の判断がつかなくなった。普門寺での生活に到ってから、逸然は自分の身も危うくなった。卑しい人が私を唆し、理由もなく長崎に行かせようしてきたことは何度もあるが、日本の国法は犯すことができない。この際、あなた（竺印）に頼んで（正式な手続きを踏んで、国法を犯すことを避けて）、長崎に帰ることを（奉行などに）申して、それで恥を避けることがあった。逸然は幸運にも落ち延びたため、私（の状況）も少し穏やかになった。

この書簡によると、独立が僧団に入った際に、同じ浙江省出身の逸然が僧団におり、確かに徐氏が指摘しているように、黄檗僧らに出身地の相違で排斥されていたようである。しかし、逸然が長崎に戻った後、僧団には浙江省出身の人が独立のみになると、福建出身者が多数を占める黄檗僧の勢力を脅かす存在でないと認識されるようになったためか、排斥は次第に解消された。このことから、出身地の相違は、独立と黄檗僧との紛争の根本的な原因ではないと判断できる。この書簡においても一つ注目すべきは、黄檗僧が独立を長崎に戻らせようとしたということである。それは、彼らが独立を、長崎に属するもので

あり、さらにその出家が長崎奉行の指示によるものだったと認識している証拠であると理解できるのではないか。

独立は僧団を離れた後、竺印宛の書簡において、自身の僧団における経歴を振り返って、「一入僧群、妒害几死、能忍能寛、得存残命（一旦黄檗僧の群れに入って、嫉妬され、迫害されて、死にかけたが、耐えて、許すことができ、残りの命を保ちえた）⁽⁵⁴⁾」と述べている。類似の記述が、一六四四年の吉川広正宛の詩作中に見られる。そこにおいて、「十年僧儕類同豹、狐鼠争群恥莫剖。遂返長崎守故吾、掩関三載矢不否（十年間の僧侶の仲間が豹のようなもので、狐や鼠が群れをなして争うように、恥を知らない。そのことで、長崎に戻って自分の本心を保ち、閉関して三年間、初心を曲げない）⁽⁵⁵⁾」と、自分の十年間の僧団生活における苦しさ及びそれが原因で長崎に戻ったことについて説明している。

この二つの文章からわかるように、独立の目から見れば、黄檗僧に対する印象は決して良いものではない。独立は彼と特に関係が悪い一人の黄檗僧、無上性尊（一六三一—一六六〇）⁽⁵⁶⁾が没した直後、竺印に「回念忌者・妬者、用心何在。総不出一場転倒夢想、今安在哉（（私を）忌む人や妬む人を振り返って考えるに、どのような考えであろう。すべてあくまで幻であって、現在はどこにあるか）」と喜ばしく述べている。ここの「忌者」と「妬者」について、「忌者」は独立の書法に関する活動を禁忌を犯すものとし忌み嫌う人物を、「妬者」は独立の書法による名声、また僧団における地位について嫉妬する人物を指していると考えられる。それぞれ、第三節と第四節で分析する。

三 「忌者」との詩・書をめぐる僧諍：独立への排斥について

黄檗僧らは独立に対して、当初から排斥していたが、摂津の普門寺に至ってからその行動はさらにエスカレートしたため、独立は字・書などについて発言しないようになった。その様子は、独立の書学著述『斯文大本』の「再跋」に窺える。

是而居攝四載、不言字、不言詩、不言醫、為遠小人災害。不知災害之日切、
 総在聞名嫉難而已也。一日還崎掩關、以了生死大事。⁽⁵⁸⁾

このことで、私が摂津（普門寺）にいた四年間、字をいわず、詩をいわず、
 医をいわなかったのは、卑しい人（黄檗僧）による災いを避けるためだっ
 た。思いもかけないのは、迫害が日増しに苛酷になるのは、すべて私の名
 声を制限し、嫉妬のために非難しようとするにすぎないことである。そこ
 で私は、一旦長崎に戻って閉関し、それで生死の大事を解決しようとした。

石村氏はこの文について、独立の医術は日本人に理解されておらず、非難さ
 れたと説明しているが、独立がその名声によって嫉妬され非難されたこと、さ
 らに自分の才能を発揮できないようにしたのが黄檗僧だったことは、次の竺印
 宛の手紙からも確認できる。⁽⁵⁹⁾

弟読四十年書、命・相・医・卜・文章・詩学・書法・仙道、俱有実授、未
 嘗説与他知。只此詩、字二種种、彼黄檗僧陷害妒忌、几至絶命。言及于此、
 不覺浩嘆。弟常見『虎関詩韻』多舛錯。欲著一本、伝之日本、以広吟詠。
 非一年不成、今無及矣。⁽⁶⁰⁾

私は四十年学問を研鑽し、命・相・医・卜（占い）・文章・詩学・書法・
 仙道、これらはすべて正統な伝授をうけたことがあるものである。ただこ
 の詩、書道の二種だけは、その黄檗僧に迫害され、嫉妬され、あやうく死
 にかけるに至った。これに関して、私は嘆いている。私はつねづね、虎関
 師鍊の『詩韻』に誤りが多くあることに気づいている。そこで私は著作を
 著し、日本に流伝させ詩歌の道を広めようとした。だが著述には一年を要
 するため、現在ではそれができないでいる。

この一冊の本を著そうという願望は、独立が鰲雲和尚所持の『虎関詩韻』の
 裏表紙に記した一節にも窺える。⁽⁶¹⁾

嘗看『虎関詩韻』、乱説。因不知唐音也。我亦有念、自著詩韻一冊、行之日本。其中略明字義、次及于韻、可以為百世之伝。因在和尚位下、不得一心、⁽⁶²⁾所以不成我願。若有檀越、先以此為第一義以伝世人、其參禪更不難耳。

かつて虎関師錬の『虎関詩韻』を読んだが、でたらめに説いている。中国語の音を知らないからである。私も自ら詩韻に関する著作を著し、日本で流布させたいと考える。そこにおいては字の意味を簡略に明らかにし、次いで韻律にも言及することで、永く伝えられるはずのものである。しかし、私は隠元のもとにあって、専心することができないため（あるいは、皆で心を一つにすることができないため）、自らの願望は達成できなかった。もし檀越がそれを第一義として世人に伝えるなら、その参禅にも利益があらう。

「不得一心」という表現は、独立が隠元の管理下に置かれた結果と、自分が著そうとした書物を著せなかった原因の両方を意味している。「得一心」には「悟りを開く」という意味もあるが、隠元の管理下で悟りを開くことができないという解釈は考えにくい。そのため、「得一心」をひとつの語句として捉えるのは無理があり、「一心」を「専念」・「専心」、あるいは「皆の協力を得る」⁽⁶³⁾という意味合いで理解する方が自然である。この一節は、隠元らとの書法をめぐる軋轢のために、独立が彼らの支持、あるいは許可を得られないこと、またさまざまな事務に追われて思うままに著述へ専心できないことを意味しているのであらう。

この一節に対して、無著はその後に様々な批判を書き加えている。ここでは深く言及しないが、独立の檀越からの支援を求める文について、無著が「哀絃求利、浅陋可笑（悲しい声で利益を求めて、浅陋で笑うべき）」と批判している点は注目に値する。⁽⁶⁴⁾実は、この「悲しい声」には、独立が書道に関して黄檗僧に嫉妬され迫害されたという背景がある。

因大眉兄上京養病。回寺云「京中毎見人、必問独立、不知有西堂、無上之名」。自此一言之後、又聳聞和尚、云弟乱写字、騙人銀子。是有独戒弟書、其中日日藏奸作害、不可勝言。⁽⁶⁵⁾

大眉性善（一六一六—一六七三）が、病氣療養のために京にのぼった。普門寺にもどって、「京都の人々と会うたびに、かならず独立のことを聞かれるのに対して、独知性機（一六〇九—一六八一）⁽⁶⁶⁾や無上性尊の名前は知らない」といった。その話のあと、無上はまた隠元に、独立がでたらめに書を書いて人からお金を騙し取っているとおおげさに聞かせた。それで私だけに書を書くことを禁じて、その間に日々悪意を隠し持って害をなしているのは、言葉で言い切れない。

この書簡においては、独立の京都における名声が何によるものであったかについて明言されていない。しかし、大眉の話の直後に、独立が書のことについて非難され、結局独立だけが書を禁止されたことから、独立の名声は書によるものであると考えられる。そして、独立は、独知と無上は独立自身の書による名声を嫉妬したと述べている。

ここで「乱写字」と「独戒弟書」という二つの部分について考察したい。独立の書が黄檗僧の書とかなり異なることは、すでに先学によって指摘されている。⁽⁶⁷⁾黄檗僧の目から見れば、独立の書が「乱写字」であるのも、当然であろう。黄檗僧の非難及び虎関師錬の『詩韻』を正すために、独立は宿願であった、字義の説明を主眼とし、音韻にも触れた、『斯文大本』を著したのであろう。

独立は竺印に「独戒弟書」と述べているが、実際は彼だけが禁止されたわけではない。黄檗僧団は普門寺にいた時、書道に対して警戒心を持っていた。林観潮は無著道忠の『黄檗外記』に基づき、隠元が墨跡に対する高槻城主の要求を断ったことで、「所為可疑」と告発されて、約一年の間軟禁された⁽⁶⁸⁾と述べている。書道のことで遭難した隠元は、「与龍溪・禿翁・竺印三大徳」という規約において、「老僧年邁怕煩。儻檀越等求墨跡、一概不書（私は年寄りで、煩

わしいことを恐れる。もし檀越らが墨跡を求めても、決して書かない⁽⁶⁹⁾」と定めた。隠元自身だけではなく、ほかの黄檗僧も書道に関わることを敬遠・警戒していた。例えば、逸然は安東省菴宛の書簡において、安東省菴の父が独立に頼んで即非如一が書した「達磨大師」という墨跡を求めたが、即非も「禁筆⁽⁷⁰⁾（筆を禁止されている）」ために、取得できないと書いている。

即非の書だけではなく、安東省菴及びその父・兄が、独立に頼んで隠元の墨跡の入手を望んだことは、彼らの書簡によって知られる。隠元が「封印閣筆（印鑑を封じて筆を置く）」・「印封戒書（印鑑を封して書を慎む）」⁽⁷¹⁾ことで、「儕輩多忌（同門の多くは（書道を）忌む）」⁽⁷²⁾ため書が取得しにくいという独立の説明からも、彼は当時、書道が僧団の存亡に関わるということを自覚していたと思われる。それにもかかわらず、独立は安東省菴及びその親族のために黄檗僧の書を入手して提供し続け、布を受け取っていた。独立と省菴は儒学を通じて⁽⁷³⁾付き合った友人であり、独立はこうした行為が僧団の存亡より重要であると考えていたのだろうが、黄檗僧の立場からすれば、書を買っているようにしかみえなかったのだろう。

以上をまとめると、独立と黄檗僧との詩・書をめぐる論争について、独立の立場からは、彼の詩・書における高い名声に対して嫉妬されたように見えていた。その一方で、黄檗僧らは独立が黄檗僧の風格とかなり異なる字を書いていたのに加え、僧団全体が書に対して慎重になっていたとき、書を書いたり、他人に黄檗僧の書を提供することで利益を得ていたりして見えたため、「忌」んでいた。

このような書をめぐる僧諍は、士大夫と仏教者との交渉・衝突の代表的例でありながら、結果としては、「日本の唐様の原点に立つ」⁽⁷⁵⁾独立が『斯文大本』という大著を著す契機となり、同書はその後の書道の発展に多大な影響を及ぼした⁽⁷⁶⁾。

四 「妬者」との僧団における地位をめぐる僧諍：独立の僧団離脱について

独立からすれば、彼が黄檗僧に嫉妬された理由とは、詩・書のほか、僧団における地位もあると考えていた。一つは、無上に侍者の位を嫉妬されたことであり、もう一つは独立によって、逸然が隠元招請の主な貢献者と目されるようになったことをめぐるものである。前者について、独立は一六五九年の竺印宛の書簡において次のように説明している。

丙申九月中、無上至普門。而照、徹与小人極意奉承、以希其幸。是有道駕、亦不能自安其位。冬日結制、弟亦不望為侍者、此和尚自立以充其隊。惡等脚与同群、無日不加排難。窃思為儒三十年、居浙江省会中、何官不見。何事不經、而希此一侍者之榮哉。逸然念弟身孤無侍、著明心隨無上至普門、留弟寮一二日、極為安貼。独知意叫自警、日日騙誘、彼至不堪。今無竟已用為侍者。出家人奸險如此、豈成大善知識位下撫法之人哉。弟因其忌嫉、⁽⁷⁷⁾去冬改充書記、則彼当自安矣。

丙申年の九月中、無上は普門寺にやってきた。そして、照、徹及び卑しい人（黄檗僧）は、心をつくしておべっかを使うことで、無上の寵愛を求めた。そのため隠元が同寺に来た時も、私は自分の地位に落ち着くことができなかった。冬安居結制の際に、私は別段侍者になることを希望していなかったが、隠元が自ら（私を侍者に）推挙してその組織の一員に充当した。悪人たちは仲間をつくり、私を排斥し非難しない日はなかった。私は三十年間にわたって儒者であり、浙江の省都の中に居て、あらゆる高官にも会った。あらゆることを経験した。こうした者が侍者としての名声を求めるだろうか。逸然は、私が単独で侍者がいないことを考えて、明心をおくり無上に従わせて普門寺に赴任させ、私の寮に一二日間に滞在させてくれたことで、心の安穩が得られた。独知は意図的に明心を騙し誘ったため、彼は

耐えられず（寝返ってしまったのだろう）、現在は無上が侍者として起用された。彼は出家者であるが、これほど邪悪で陰険であっては、なぜ大善知識のもとでその法を継ぐ人となれるだろうか。私は彼らのその憎悪と嫉妬で、去年の冬に書記となり、それで彼らは納得したはずである。

この記述によると、独立は一六五六年の冬安居の時、隠元に侍者に任命されたが、中国からきた無上性尊にその僧団における侍者の地位を嫉妬され憎悪されたことで、仕方なく書記となった。つまり、独立の出家は、書記を担当することとは関係なかったのである。そして、独立が無上に嫉妬されていたのは、ほかならぬ侍者という職位のためである。安居会における侍者とは、僧団において住職と最も近い関係を持っている職位であるため、隠元が日本において最も重要視している「付法」⁽⁷⁸⁾の候補となることを意味している。そのためか、独立は無上のような人は、隠元の付法弟子になることはできないと批判している。その一方で、独立は、自分が如何なる高位の官人とも会ったことがあり、侍者程度の栄光を求めないと述べている。

そうした嫉妬・迫害を避けるため、独立は同じ医者である、中国江西省出身の五雲子を通じて、江戸で活躍することを図った。この計画が失敗に至った経緯について、独立は一六六二年の竺印宛の書簡において以下のように述べている。

弟想戊戌五雲子告状留弟、彼以仁左衛門為彼莫逆世交、先露其意。臨事時、五雲子接弟去議、彼即深夜合龍溪去見美濃守、入朝阻伊豆之留、可謂鬼神莫測之機、以合福州鄉党之義。⁽⁷⁹⁾

私は、五雲子が私の在留を長崎奉行に請求したことについて、こう考える。彼は、仁左衛門が先代から付き合いのある親友であると考えて、先に、私を在留させようとする意向を漏らした。私が計画を実行しようとするとき、五雲子が私を迎えて相談に連れて行った。仁左衛門はすぐさま深夜であっ

でも、龍溪とともに美濃守に会い、朝廷（幕府）に訴え、私の伊豆在留を阻止しようとした。彼らのこの行為は誰にもわからない謀略であり、彼は郷里である福州の道義にかなう行為をしようとしたのだった。

ここの仁左衛門とは、諱は劉宣義、法名は道詮といい、一六五五年、二十四歳から隠元の通事を担当し始めた人物である。そして、隠元とは四十一歳の年齢差があるにもかかわらず、隠元から並々ならぬ信頼を寄せられた人物である。⁽⁸⁰⁾ 仁左衛門は、隠元側の人であるため、独立が隠元らにとって不利益なことをしようとするなら、それを阻止するのも当然だろう。そして、独立の計画のため奔走していた五雲子に対して、隠元は「道情濃淡款杯茶、舒卷舌鋒驗正邪。拄杖旁觀相借問、五雲深处是誰家（仏道の情義の濃淡にせよ、一杯の茶を飲んで、話し合って正義か邪惡かを調べ正す。傍觀する拄杖に聞く、五雲は誰の家の者なのか）」と、果たして誰の仲間であるかと厳しく注意した。独立の僧団離脱の計画は、当時黄檗派において大きな騒ぎを引き起こしたと考えられる。徐氏は独立の書簡に基づいて、独立が江戸滞在などを実現できなかったのは、彼が何かを計画した際に、長崎奉行の黒川が直ちに仁左衛門に知らせて、京都出身の黄檗僧龍溪性潜とともに阻止したためであった、と指摘しているが、龍溪が独立をそれほどまでに迫った背景までは分析していない。⁽⁸²⁾ 次の竺印宛の書簡において、独立は一六五七年に逸然を助けたことにより、龍溪に恨まれたことを記述している。

丁酉刻『扶桑語録』、無上奈何、索其請啓以驗録中復書、一日之中為補六啓、以至眾国彰名逸然之請。斯時、若無請啓、即為独照所刻。龍谿由是啣弟切齒、事事俱在人聞耳目間。⁽⁸³⁾

一六五七年に『扶桑語録』を版刻した際に、無上は不本意であっても、逸然の請啓を探し求めて、隠元語録の返事部分を検証した。私は逸然のために一日のうちに六通の請啓を補い、そのため各藩における逸然の要請が明

らかになった。この際、もしこれらの請啓がなければ、独照が作った原稿と同様になっただろう。そのため龍溪は憤って私を恨んだ。これらの経緯は多くの人々に確実に知られていることである。

平久保章氏は、『扶桑語録』には「明暦版」と「明暦版の増補本」という二種のもが存在し、さらに両者の相違として、「明暦版の増補本」について「「請啓六・復書二」は他の語録になく、本語録にだけ収録されている⁽⁸⁴⁾」と指摘している。この「請啓六・復書二」が増補本において後に補われたものであることは、独立の記述を裏付けている。

その請啓がなくなった理由は、引用文の前にある逸然の話によると、「惟・照」に隠されたためであるという。先に引用した、独立の一六五九年の竺印宛の書簡においても、無上と一緒に独立を排斥した人として、「照・徹与小人」と記されている。

徐氏は「照・徹与小人」について、「徹」が「惟徹道澄」、つまり月潭道澄(一六三六―一七一三)であることは断定できるが、「照」が「惟照道用」、または「独照性円」のいずれかは判断できないという。文字は異なるが、「惟・照」と「照・徹」は同じ二人を指していると考えられる。そこで、「惟・照」と照らし合わせるとどうだろうか。月潭道澄の道号は「惟徹」(一六五四年に「月潭」に改めた)⁽⁸⁷⁾であるため、「惟」も「徹」と同様に彼を指していると考えられる。そして、「照」が指す人物の候補として徐氏が挙げている二人のうち、惟照道用は十二歳の時、逸然に投じて出家したという⁽⁸⁸⁾。惟照は逸然の弟子であるため、逸然に不利益なことをしたとは考えにくい。一方、独照性円(一六一七―一六九四)は一六五四年隠元渡来の際に、月潭らとともに興福寺で隠元に参詣し、侍者となった。また、龍溪に協力して隠元の日本在留に尽力したという⁽⁸⁹⁾。これらのことから、惟照と独照はそれぞれ逸然と、月潭・龍溪の味方であることがわかる。加えて、独立のいうように、もし彼が補った請啓がないなら『扶桑語録』は独照が作ったもののようになったということからも、書物を隠した

人物の一人は、独照であったに違いない。

逸然の請啓を隠したのは、隠元招請に際して、逸然の功績を黙殺し、龍溪の功績を高めて強調するためであろう。類例として、黄檗僧が書物を隠したこともあった。道者超元の弟子、独庵玄光（一六三〇—一六九八）によると、道者の帰国は黄檗僧が道者に嫉妬して、その師匠、亘信行弥（一六〇三—一六五九）から授けられた嗣法の証となる衣鉢を奪って、長崎奉行に告発したためであった。⁽⁹⁰⁾

おわりに

本稿では先行研究を検証した上で、独立の渡日・出家、そして黄檗僧との僧諍及びそれを原因として僧団を離脱した経緯について考察した。その上で、従来の誤解を正して、特に徐氏が機会主義者（オポチュニスト）ないし頻繁に虚言を発しているかのように描いた独立の人物像について、史料に基づいて再構成を試みた。

独立の出家は、ただ生活の安定を求めるためのもの、不本意なものというだけでなく、仏教に対する親近感、さらに黄檗への憧憬によるという側面があることは看過できない。しかし、実際に黄檗僧と接触した際に、詩・書、また僧団における地位のために嫉妬され迫害されたと独立は感じていた。その具体像について、本稿は「忌」と「妬」に分けて論じた。「忌」については、仏教者と交流していたものの、やはり儒学を本分とし、医術を生業とする独立は、仏教者のタブーを犯したために「忌」まれたのであった。「妬」については、独立のみならず、東皐心越についても、その名声のために、黄檗僧の鉄牛道機らが彼を長崎奉行に告発して、すぐに中国へ追放しようとした⁽⁹¹⁾。また、大通事林道榮も同じように、江戸で評判が良すぎて憎まれ長崎に戻ったということである。⁽⁹²⁾

独立の黄檗僧との僧諍は、僧諍研究の上で、三つの意味がある。第一は、独立の伝記研究及び思想研究の基盤を作り直すことである。ここまでの考察によ

り、独立の出家動機といった問題について、従来までの論考を検証して、その人物像を再構成した。第二は、士大夫と仏教者との関係を、異国という従来考察されてこなかった観点から研究した。独立は、その仏教者との書道、また『元亨釈書』に対する態度の違い及びそれによって生じた衝突を原動力として、『斯文大本』や『元亨釈書評閲』を著して、近世思想に深く影響を及ぼした。その意味でも、日中思想交流史において重要視すべきであろう。第三は、その国際性である。書道が僧団存亡の問題となったのは、前に触れたように、高槻城主の告発によるものだった。その背景には、明清鼎革にあたり、日本幕府が、日本へ乞師して渡来した中国人に対して警戒していた当時の状況があった。そのため、地方官が幕府に告発すると、被告は容易く不審者と判断され軟禁されたのである。

本稿は独立の黄檗僧との僧諍を主眼において考察するとともに、道者超元や東皐心越の事例とも比較した。この比較によって、名声のため嫉妬され迫害されたという共通のパターンが見出せた。より広範囲で比較することで、その時代の特徴を一層明らかにすることができるだろう。それは今後の課題とする。

〈謝辞〉本研究は、JST 科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ 創設事業 JPMJFS2102 の支援を受けたものです。

【注】

(1) 「僧諍」という概念について、「明朝最末期から清朝康熙年間にかけて禅門で繰り広げられた諍い（論争、紛争）を取り上げ、詳細な論証を施したもの」であるという柴田篤の『清初僧諍記』に対する説明により、「禅門で繰り広げられた諍い（論争、紛争）」として理解するのが適切であろう。

柴田篤「陳垣撰 野口善敬訳註『訳註 清初僧諍記－中国仏教の苦悩と士大夫たち－』」、『中国哲学論集』（十六）、一九九〇、七二頁。

(2) 士大夫は異民族の統治を潔しとせず、政治に参与しない節義を保とうとして、

- 遺民となった。その一部は禅門への逃避・隠棲して、「逃禅」や「遺民僧」と称される。
- (3) 荒木見悟「序」、陳垣撰、野口善敬訳註『清初僧諍記：中国仏教の苦悩と士大夫たち』、中国書店、一九八九、I－II。
 - (4) 大槻幹郎他編著『黄檗文化人名辞典』、思文閣、一九八八（下記、『人名辞典』と略称する）、三四一頁参照されたい。
 - (5) 『人名辞典』、三一六頁参照されたい。一説、一六六二年に没した。
Enlightenment in Dispute, Jiang Wu, Oxford University Press, 2008, p5.
 - (6) 野口善敬「明末清初僧諍覚書（一）：覚浪道盛の密雲円悟批判を巡って」、『宗学研究』（通号 二九）、一九八七、一七九－一八四頁。「牧雲通門の「五論」をめぐる：明末清初僧諍覚書二」、『宗学研究』（通号 三二）、一九九〇、二五一－二五六頁。「宗範」について：明末清初僧諍覚書（三）」、『宗学研究』（通号 三三）、一九九一、二九九－三〇四頁。
 - (7) *Enlightenment in Dispute*, Jiang Wu, Oxford University Press, 2008.
 - (8) Ibid, p306.
 - (9) 拙稿においては、従来の僧諍研究の主な対象であった密雲・費隱の弟子で、日本にわたって黄檗宗の開祖となった隠元隆琦（一五九二－一六七三）は、その「投機偈」で費隱の邪法に打ち勝つという「戦闘的な精神」を表明したことで、費隱の嗣法となったことを論じた。賈光佐「隠元の嗣法とその精神について」、『黄檗文華』（一四〇）、二〇一九、一九八頁。
 - (10) 「明朝遺民の逃禅もあり、この時代の歴史・文学・思想を研究する上にも欠くことの出来ないもの」。野口善敬「訳者はしがき」、陳垣撰、野口善敬訳註『清初僧諍記：中国仏教の苦悩と士大夫たち』、中国書店、一九八九、III。
 - (11) 竹貫氏の考察によると、一八七六年に教部省の「達」で、黄檗派が臨済宗から分離独立し、「黄檗宗」を公称とした（竹貫元勝『隠元と黄檗宗の歴史』、法藏館、二〇二〇、三四六頁）。しかし、独立は、隠元らを「檗山会下」（賈光佐「独立「檗山遺草序」之校訂与釈義」、『黄檗学特刊』（二〇二二年増刊）、福建省：福州大学、二〇二二、二一二頁）や「彼黄檗僧」（『書簡集一』、十一丁表）→（独立性易作、吉永雪堂写『独立公書簡集一』、万福寺文華殿蔵、請求記号と－772－吉永（以下、『書簡集一』と呼ぶ）、十一丁表）などと呼ん

でいることから、彼は当時から「黄檗」という用語を意識しているといえよう。本稿では、隠元一派を「黄檗宗」、またそこに属する僧侶を「黄檗僧」という語を便宜的に用いる。

- (12) 拙稿で述べた例を挙げれば、隠元の「東渡扶桑諸祖伝」をはじめとして、即非や高泉らが僧史を編纂することで、仏教が統治をよくする、いわゆる虎関師鍊の「資治表」と同様の論旨を宣揚するのに対して、独立は、「資治」は儒者の役目であり、仏教者がそれに参与してはいけないと主張している（賈光佐「独立性易撰『元亨釈書評閲』の史料的価値と思想的立場」、『印度學佛教學研究』(七〇(一))、二〇二一、二三八—二三九頁)。
- (13) 呉疆「隠元禪師研究の未来」、『黄檗文華』(一四一)、二〇二二、九〇頁。
- (14) 東条琴台『先哲叢談続編』、千鍾房、一八八四、卷一二十八丁表。
- (15) 桂芳樹『僧独立と吉川広嘉』、岩国徴古館、一九七四、八〇—八一頁。
- (16) 無著は独立の「請藏化縁引」及び「題『聚分韻略』」について、「今見其「請藏化縁引」、素昧於仏学、所謂「天生黄面」、非仏氏之言。『聚分韻略』之題云、「参禅不難」、此是外儒輕薄語、実頭巾習氣難脱耳」という識語を記している。無著道忠抄、独立著「題聚分韻略」、『万里砂』、春光院蔵、四頁。
- (17) 韋祖輝『海外遺民竟不歸——明遺民東渡研究』、商務印書館、二〇一七、八二—八五頁。
- (18) 梁容若『中日文化交流史論』、商務印書館、一九八五、二七四頁。
- (19) 「偶鼎革の変に當り惨憤胸に迫る遂に永曆七年癸巳の三月海に航して、本邦長崎の地に抵る時我承應二年なり、師年五十八」。山本悦心編『黄檗東渡僧宝伝』、黄檗堂、一九四〇、一一丁裏。「其奈馬蹄鼠尾、痛心慘目。暫附舟至日本交易、以遠睹聽。陰涉大川、於癸巳年三月舟到長崎」、独立書『獨立禪師寶帖』、早稲田大学図書館蔵、請求記号 チ 6 4743。
- (20) 高井恭子「黄檗僧独立性易の經史批判の特色—唐朝における正史整備事業と仏教の關係」、『東海仏教』(四六)、三〇頁。
- (21) 「時有粵人招致曼公乘桴浮海、快滌煩襟者。癸巳上春發帆、三月直著崎嶇、是為承應三年。鎮臺橋正述、甲斐庄喜右衛門、請淹留於此、馳書上乞。曼公在崎一年而辭歸、是為踏海之啓行矣。翌年甲午七月僧隠元、応徵聘東渡、將大振揚黄檗宗旨於此土。遍求堪書記之任者。曼公歎曰「將至耳順、命有幾何。

矢心脱白、以畢殘喘。」状求出家、乃歸之薙髮。即臘月八日也。」東条琴台『先哲叢談統編』、千鍾房、一八八四、十一丁表一裏。

- (22) 今関天彭『近代支那の学芸』、民友社、一九三二、四〇五頁。
- (23) 前掲書、四〇五頁。
- (24) 『人名辞典』、二一—二三頁を参照されたい。
- (25) 山本悦心編『黄檗東渡僧宝伝』、黄檗堂、一九四〇、一一丁裏。
- (26) 桂芳樹『僧独立と吉川広嘉』、岩国徴古館、一九七四、十四頁。
- (27) 石村喜英『深見玄岱の研究』、雄山閣、一九七三、四一〇頁。
- (28) 梁容若『中日文化交流史論』、商務印書館、一九八五、二六八頁。
- (29) 「次年甲午七月、普照国師応聘東渡、大振法威。師嘆「年垂六甲、命有幾何。矢心脱白、用畢殘喘」。状求出家、乃帰国師座下薙染。」深見玄岱『明独立易禪師碑銘並序』、平林寺蔵（以下、『碑銘』と略す）。
- (30) 徐興慶著、野川博之訳「「儒、釈、道、医」を通じた日中文化交流」、徐興慶、劉序楓編『十七世紀の東アジア文化交流：黄檗宗を中心に』、「国立」台湾大学出版中心、二〇一八、一五三頁。
- (31) 前掲書、一五三頁。
- (32) 梁容若『中日文化交流史論』、商務印書館、一九八五、二六九頁。
- (33) 徐氏前掲文、一五八頁。
- (34) 「流転人生」、一五二—一五三頁。
- (35) 南源性派『藏林集』、田原仁左衛門刊、祐徳稲荷中川蔵、請求記号：ユ 1-285-8、一六七五、巻第一、十六丁表。
- (36) 「時荷鎮主着通事查考同舟来歴、知某業儒知医、保留在崎、医縁自度。窃念髮白身孤、計莫終老。幸遇黄檗隠元和尚東来、願皈依為座下弟子、志参禅理、以畢終命。就甲午年十二月初八日、秉明鎮主、染剃為僧、隨行杖履。」独立性易『千字文跋』、早稲田大学図書館蔵、請求記号：ト 02 04575 A65。
- (37) 「偶避明山虜患、放足天下、適至貴邦。情非利渉、亦非閑遊。不意長崎主政愛我、疎闕乞留、亦千載知遇之奇也。」『安東省菴集 書簡編』、柳川市、二〇〇五、三五四頁。
- (38) 『安東省菴集 書簡編』、柳川市、二〇〇五、（以下、『安東書簡』と略称する）三五〇頁。

- (39) 「秋残、逸然苦乏、弟有動念還唐、不然真難度日。」『書簡集一』、七丁表。
- (40) 「八月中、弟必出関。就黒川在崎、求還郷去。十年信約、日本決不欺人。若言和尚相関、今現居兩地、音信相乖、勿得奉彼欺我。若必不允、当与沙劫竜王一相会、以訴胸中不平如此、乃素願也。」『書簡集一』、十一丁里。
- (41) 正月病のため辞して平林寺を出立長崎に向かい、二月末長崎に着して一時興福寺に寄住す。二月末興福寺属幻寄山房に閉居す。(石村喜英『深見玄岱の研究』、雄山閣、一九七三年、六六一頁) 大槻幹郎『文人画家の譜: 王維から鉄斎まで』(べりかん社、二〇〇一、一一八) も参照されたい。
- (42) 石村喜英『深見玄岱の研究』、雄山閣、一九七三、四七五頁。
- (43) 桂芳樹『僧独立と吉川広嘉』、岩国徴古館、一九七四、十六頁。
- (44) 「流転人生」、一五三頁。
- (45) 「流転人生」、一六五頁。
- (46) 独立『東矣吟』、国立公文書館蔵、請求記号: 313-0312。
- (47) 鶺鴒冠: ヤマドリ羽を飾りつけた冠。武官の冠。『全訳漢辞海』を参照されたい。
- (48) 『東矣吟』。
- (49) 趙園は「逃禅が明清の際に特に盛んであったことと、清初の剃髮令とは必然的に関係している」と指摘している。
趙園『明清之際士大夫研究』、北京大学出版社、一九九九、三〇九頁。
- (50) 「流転人生」、一六〇頁。
- (51) 「三呉瓢納之侶、多推重槩山会下。機縁語句、可以咳唾江漢、鞭策方外。往予欲作杖履之攀、詎以閩浙道路三千、未成我契。間者又遭虜革、慨出乘桴、遠羶自善、不意寓留轍跡。寒燠再經、奇逢我大師東來闡化、得遂染剃、棄我章縫、以安許大。誠千載一日之縁、万劫一生之証也。」賈光佐「独立「槩山遺草序」之校訂与釈義」、『黄檗学特刊』(二〇二二年増刊)、福建省: 福州大学、二〇二二、二一二頁。
- (52) 独立の黄檗僧との摩擦を考察する上で、竺印への書簡が参考になる。竺印は最初隠元の普門寺招請などを努力していたが、一六五八年に龍溪と対立して、隠元のことから手を引いていた(平久保章『隠元(人物叢書 新装版)』、吉川弘文館、一九八九、一三五—一三六頁)。そのことによるのだろうか、竺印は

独立が自分の黄檗僧との矛盾を打ち明ける相手となった。

- (53) 『書簡集一』、一丁表。
- (54) 『書簡集一』、十四丁表。吉永氏による「寛文二年頃？」という頭注に従えば、一六六二年に書かれた書簡ということになる。
- (55) 独立「病中答岩国主遣問頼至」、熊谷玄且編『独立詩集』、一七〇五、岩国徴古館蔵、資料番号：1901000831。

宇都宮由的の跋文によると、この『独立詩集』は熊谷玄且によって編纂されたものである。また、その跋文は宝永二年に書かれたもので、一七〇五年の写本と推測される。

この「病中答岩国主遣問頼至」の「引」において「有焦氣抑上、挟相火結滯耳根、痛楚及月。重荷大君時時遣問、昕夕不息。情篤于辞、勒深千古。敢措答言以伸悃悞云爾」と述べた。桂芳樹は『岩国沿革志』や『中津日記』などに基づいて、五月初旬から独立は熱を出しており、その熱は「腫物のためだったようである。瘍か疔か、あるいは中耳炎だったかもしれない」と指摘している。そして、吉川父子の行動について、「同二十五日には御客屋（筆者注：独立が病気のため、御客屋に移った）へ広正自身が見舞っている。広嘉からもむろん度々、見舞の使がいったはずである」と指摘している。上記のことをまとめると、初旬から二十五日にかけて、独立の中耳炎のような症状とそれによる熱は、「挟相火結滯耳根」であり、またそのような期間は独立のいう「及月」であると考えられるため、この詩は吉川広正に贈られたものであると推測できる。

桂芳樹『僧独立と吉川広嘉』、岩国徴古館、一九七四、四一―四三頁を参照されたい。

- (56) 『人名辞典』、三四六頁。
- (57) 『書簡集一』、九丁表。頭注に「寛文元年」とあり、一六六一の書簡であると思われる。
- (58) 独立性易『斯文大本』、大阪大学懷徳堂蔵、請求記号：1 - 10 - 03 明 Ⅱ 釈。
- (59) 石村喜英『深見玄岱の研究』、雄山閣、一九七三、四七六頁。
- (60) 『書簡集一』、十一丁表。
- (61) この文は無著道忠（一六五三―一七四五）の著作『万里砂』の「題聚分韻略」

に書き写されており、「右独立親筆於鰲雲和尚聚分韻略背面」と説明されている。

- (62) 無著道忠抄、独立著「題聚分韻略」、『万里砂』、春光院蔵、四頁。
- (63) 「一心」の意味について、『岩波仏教辞典（第二版）』では、「元来必ずしも仏教語ではなく、皆で心をつにする意、あるいは専心する意で、中国古典にもみられる。仏教でも特に専心する意では多く用いる」として「皆で心をつにする」あるいは「専心する」の意味で記されている（中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編『岩波仏教辞典（第二版）』、二〇〇二、四七頁を参照されたい）。

また『日本国語大辞典』では、「一心」の語誌について「(1) 梵語 *eka-citta* の訳としての『ある一つのことだけを考える』の意から、『ある対象に心を集中して、心を動かさないこと』という②（心をただ一つことに集中すること。他事を思わない心。専念。（筆者補記））の意味が生じる。ここから、『一心不乱』『一心念佛』、また、漢語副詞としての『一心に』などのさまざまな語が生まれた。(2) ②は、『一個人が心の一つのことに集中する』場合であるが、③の漢籍例『荀子 - 議兵』などには、主に戦争の場面で、『多くの人が心をつに合わせる』という意味でも用いられ、日本においても戦中の文書によく現われる」と記されている。（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』（第二版第一巻）、小学館、一一六七頁を参照されたい）。

上記の説明を踏まえ、また独立の書簡の文脈を合わせて考えれば、「専念」・「専心」が最も自然な理解である。

「皆で心をつにする」・「多くの人が心をつに合わせる」という意味では主に戦時中に用いられたと指摘されているが、その意味で「一心」が使われた可能性もある。

- (64) 無著道忠抄、独立著「題聚分韻略」、『万里砂』、春光院蔵、四頁。
- (65) 『書簡集一』、二丁表。
- (66) 徐氏はこの「西堂」は「独知（慧林）性機」とであると指摘している（「流传人生」、一五六頁）。
- (67) 淡川康一は「他の黄檗者とその趣を異にする」。淡川康一「黄檗の書について」、

- 『墨美』(113)、墨美社、一九六一年、第六頁。
- (68) 林觀潮『隱元隆琦禪師』、廈門大学出版社、一〇八頁。
- (69) 大槻幹郎編著『祥雲山慶瑞寺：龍溪禪師三百三十年忌記念』、祥雲山慶瑞寺、二〇〇四、八二頁。
- (70) 『安東書簡』、二〇八-二〇九頁。
- (71) 『安東書簡』、二〇七頁。
- (72) 『安東書簡』、二〇一頁。
- (73) 『安東書簡』、二〇七頁。
- (74) 田渕義樹「独立—安東省菴と朱舜水をつないだ黄檗僧」、徐興慶、刘序楓編『十七世紀の東アジア文化交流：黄檗宗を中心に』、国立台湾大学出版中心、二〇一八、第一九八頁。
- (75) 中田勇次郎「序」、米田弥太郎『近世日本書道史論考』、柳原書店、一九九一、三頁。
- (76) 賈光佐「独立性易的六書学与日本近世書法」、『中国書法』(六五)、一〇七頁。
- (77) 『書簡集一』、一丁里-二丁表。
- (78) 賈光佐「達磨の面影：隱元の東渡の動機及びその意義について」、『黄檗文華』(一四一)、二〇二二、一七一頁。
- (79) 『書簡集一』、一二丁表-裏。吉永の写本には「寛文二年」との頭注がついている。
- (80) 宮田安『唐通事家系論攷』、長崎文献社、一九七九、一六二頁。
- (81) 平久保章編『新纂校訂隱元全集』、開明書院、一九七九(以下、『隱元全集』と略す)、二九三二頁。
- (82) 「流転人生」、一七一頁。
- (83) 『書簡集一』、十四丁裏。
- (84) 『隱元全集』、二十二頁。
- (85) 「復告於弟、「唐人、日本方知狗心之久窃耳。若無久口之心、惟・照安敢先匿寄来書物耶。」『書簡集一』、十四丁表-十四丁裏。
- (86) 徐氏前掲文、一五九頁。
- (87) 『人名辞典』、九九頁。
- (88) 『人名辞典』、三〇〇頁。

- (89) 『人名辞典』、二七五頁。
- (90) 林觀潮「明僧道者超元の帰国について」、『花園大学国際禅学研究所論叢』(六)、二〇一一、一〇三頁。「次韻謙禪人送道者禪師帰大明 時言、道者之本師亘信禪師、遥贈衣鉢、附商舶來。而有同門之師妬道者、横奪衣鉢、諷執政而逐之。」『径山独庵叟護法集卷八・稿一』、鏡島元隆監修『独庵玄光護法集』、至言社、一九九六、一四二頁。
- (91) 「応長崎延命寺之請、撰『法華三昧経銘』、至今猶存。師之名声、由此日益広揚。時臨・黄僧徒、嫉師之成功。惟恐曹洞復興於東海、臨・黄將相形見绌、遂謀害師。黄檗僧鉄牛・曇瑞・兆溪探知師抵崎時、曾權称黄檗僧事。窃喜、擬告長崎奉行假冒黄檗僧之名而入国境、応即驅之帰国。」高羅佩「東臯心越禪師伝」、『明末義僧東臯禪師集刊』、商務印書館、一九四四、八頁。
- (92) 林陸朗『長崎唐通事：大通事林道栄とその周辺（増補版）』、長崎文献社、二〇一〇、五〇頁。